『極道生徒会 ～ 学園祭に咲く悪の華』

文・秋庭　里美
イラスト・カタクラ　ユキ

「嫌な予感がする」
高橋が言った。
「どんな予感だよ？」
「ああ……またあの二人がやらかしてくれそうな『予感』ってヤツだ」
只野の質問に答えた高橋が渋面を作る。
「あははは。曖昧だな」
笑って突っ込みを入れた僕だったが、人間の第六感とは恐ろしい。高橋の『嫌な予感』は的中した。
「今度の学園祭でのショバ代を各クラス、部活等に要求する」
十一月上旬開催の学園祭についてを話し合う会合で、松田さんの発言に時が一瞬、凍りつく。
「ショバ……代？」
「ショバ代ではなく、上納金ね」
思わず呟いた僕らに向けて都築さんが言いなおした。
「待った、都築。なんで訂正する必要がある？　ショバ代はショバ代以外の何ものでもないだろ」
「あら、薄暗さが漂う言葉、普通の人にはは分からないわよ」
嫌味を言われた松田さんが歯軋りをする。
「じゃぁ、みかじめ料だな」
「センスの欠片もないわね」
畳み掛けるように都築さんが腕組みをして切り返す。だが、松田さんも負けてはいない。
「六法全書でも開いているみたいな小難しい言葉じゃ、誰も分からないから、ショバ代でいいんだ！」
単純明快な言葉がいいのだとでも言いたげに、ふんぞり返って反撃した松田さんがフンと鼻を鳴らした。
上納金だって、ショバ代をちょっとだけ上品にしてみただけの響きしかない。僕なんかからすると、センス云々より、見も蓋もないだけのような気がする程度の違いしか感じないのはなぜだろうか？